

たじり田んぼの生きもの宣言 ～『生きものを育む田んぼ』をいつまでも

2009年12月15日、東都生協、JAみどりの田尻支店（宮城県）、大崎市田尻総合支所（同）などからなる「田んぼの生きもの調査プロジェクト」は、「たじり田んぼの生きもの宣言」を発表しました。同日開催した式典には関係団体約50人が参加。6月から4回にわたって実施した田んぼの生きもの調査と何回もの協議を経て発表に至ったもので、田んぼの生きものと共生した農業をすすめる旨をうたった宣言としては日本初となります。

宣言文では、「安全・安心な田んぼづくり」をめざすだけでなく、土づくりや複合生態系としての「里地・里山」の多様性の維持や、地域の文化への貢献、産直活動の推進など、10項目の宣言が盛り込まれています。

■生きもの調査が形になった■

東都生協とJAみどりの（田尻）とは旧田尻町農協から15年以上の提携関係にあり、東都生協が供給するひとめぼれの約4割を同農協が生産しています。活動としては、2005年より「生きもの観察」を行い、2008年度からは本格的に組合員がかかわって田んぼの生きもの調査を行っています。

今回の宣言は、この間生産者自身が行ってきた生きもの調査や、その農法への応用など地道な活動を消費者に広めるねらいもあり、生産者も大変期待しています。

■生産現場を想像できる消費者づくりへ■

東都生協ではJAみどりので生産された産直米の包材に、「田んぼの生きもの宣言」マークを付けたり、商品案内を通してこの取り組みを広く組合員に伝えています。田尻の産直米が単に“宮城のひとめぼれ”ということではなく、たくさんの生きものを育む田んぼで、生きものに温かいまなざしを向ける生産者が作った米であることを多くの人たちに知ってもらい、この産直米を食べることが、田んぼや周囲の環境、たくさんの生きものたちを守ることにつながることを実感してほしいと考えています。

東都生協がすすめる「食の未来づくり運動」の行動提起の1つ「ライフスタイル提案」では、「食べ物から生産現場を想像できる消費者づくり」に取り組んでおり、今回の宣言でもこのことをめざしています。生産者が生きものとの共生をめざした努力をしても、それを理解し、生産された農作物を買い支える消費者がいなくては、その取り組みは継続しないからです。

田んぼの生きもの宣言マーク



このマークは、生物多様性によって人と田んぼが支えられていることを表わしています。バックの色は、水の青、植物の緑、大地の茶を表しています。私たちが目指すべき「なつかしい未来」を象徴しています。

たじり田んぼの生きもの宣言（全文）

私たちの未来に見えている風景は、四季折々に美しく姿を変える田んぼの中に、たくさんの鳥や虫、草花に囲まれて、食べる人を思いながら働く農家の姿です。そして、食卓で楽しく語らい、そこで育った生きものやお米をつくった人に思いを馳せることのできる消費者の姿です。私たちは、田んぼの生きものを一緒に調べ、話し合うことで、その未来が確実に訪れることを確認してきました。

私たちは未来の子どもたちにこのままの地球、このままの風景を残し、生物多様性を育み、持続可能な生産を支える水田農業を伝えていくために以下の宣言を行います。

- ◆安全・安心な田んぼをめざします
- ◆健全な土づくりを行います
- ◆環境に配慮した栽培技術の向上に努めます
- ◆地域の多様な生きものを育みます
- ◆複合生態系としての「里地・里山」の多様性を維持します
- ◆田んぼと周辺の環境配慮に努めます
- ◆地球温暖化防止に貢献します
- ◆地域の文化を守ります
- ◆人と人のつながりを大切にします
- ◆産直活動を広げます

日本は、古くから稲作を中心とした農業を営んできました。そして、稲作自体が日本の文化を熟成してきたともいえます。それは、自然の恵みへの感謝の心を表現した祭り、伝統的で持続的な「食」だけでなく、「衣」や「住」に自然の中にあるものを活用しながら生活をしてきたことに表れています。

また、この地域で生産されたお米は「本石米」として江戸に出荷され、現在でもその技術は長く受け継がれ、良質米産地として発展してきました。

高度経済成長期以降の農業は食糧増産を第一の目標に掲げ、効率化や省力化をはかってきました。そして、農薬の開発や化学肥料の普及等に支えられ、経済効率が優先される技術がすすめられてきました。しかし、その結果、環境汚染などの弊害が生じました。

田尻地域では、生産者の健康、安全でおいしい農産物と環境保全にこだわり、30年ほど前からダイオキシンを含む農薬や航空散布の廃止などの運動をすすめ、生協との信頼関係の中で産直事業を発展させてきました。そして、農業体験等の交流を通じて消費者と生産者が生活と文化について学び合い、食と農のあり方を共に考えてきました。

田んぼは食糧生産の場だけでなく、トンボやメダカ、カエルなどの多様な生きものの生息地です。特に田尻地域は天然記念物のマガンの飛来地になっており、第9回ラムサール条約会議（2005年）で「蕪栗沼（かぶくりぬま）・周辺水田」が登録されたことも地域の生きものと共生する農業への関心を高めることになりました。

生きものとの関わりの中で営まれる産業が農業であることを考えるならば、豊かな生態系がなければ、持続的に生産を続けることは不可能であり、生きもの調査をすることによって農薬や化学肥料を減らすことが可能になることをこれまでの田尻地域の実践が物語っています。

生物多様性や地球環境保全に寄与する環境保全型農業と産直活動を踏まえ、生産者、農協、生協、流通関係者、NPO、行政などで「田尻地域田んぼの生きもの調査プロジェクト」を結成し、活動を続けてきました。農薬の成分や化学肥料などで規制されている認証制度によって安全・安心を証明することから、もう一度、生産者と消費者の目線で農業を見直すために「たじり田んぼの生きもの宣言」を発信することにしました。

「たじり田んぼの生きもの宣言」は、このような田んぼの生物多様性の持つ大きな意義と可能性を共通認識するための宣言です。人間を含み、すべてのものは常に変化し続けていることを認識し、「たじり田んぼの生きもの宣言」もまた、その変化に呼応し「生きている」宣言でありたいと願っています。

2009年12月15日

田尻地域田んぼの生きもの調査プロジェクト:

東都生活協同組合・みやぎ生活協同組合

JAみどりの・田尻産直委員会・JAみどりの田尻稲作生産部会

田尻地域有機農業研究会・田尻地域集落営農組合

パールライス宮城・全農パールライス東日本・JA全農

NPO法人田んぼ・NPO法人蕪栗ぬまっくらぶ

大崎市田尻総合支所